

創刊号（一九一五年九月）表紙



大正デモクラシーを背景に  
華々しく展開した民衆芸術運動の  
指導者・加藤一夫主宰の  
総合文芸雑誌

# 科学と文芸

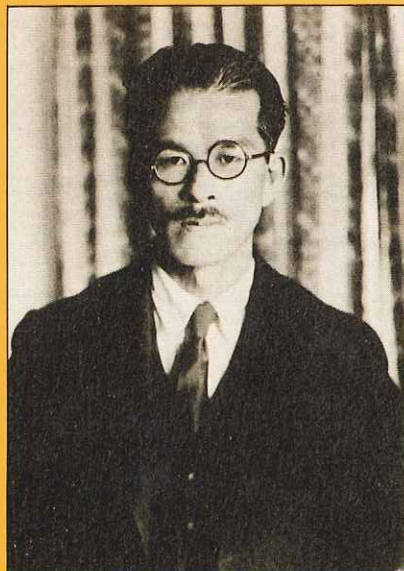
大正四年九月〜七年八月

解説 紅野敏郎・大和田茂 跋 加藤不二子

全七巻別冊一冊 揃定価九八、〇〇〇円

社会文学雑誌叢書  
第II期刊行開始!

●不二出版



加藤一夫



西村伊作、K氏(加藤一夫の肖像)



西村伊作



# 加藤一夫と雑誌『科学』と文芸』

復刻の言葉

本誌は、加藤一夫主宰の総合文芸雑誌である。一時『近代思潮』と改題するが、後に旧題に復し、総三三冊刊行された。当初は文化学院設立者、西村伊作との共同事業として始められ、『近代思潮』改題のころは人見東明が協力した。大正デモクラシーを強く反映した月刊雑誌で、人道主義者、キリスト者、民衆詩派などが交錯し、幅広い交流を示している。内容と同時に執筆者も沖野岩三郎、賀川豊彦、小川未明、武者小路実篤、和辻哲郎、与謝野晶子らと多彩で、豊かな様相を見せている。もととも『六合雑誌』の有力な執筆者であった加藤一夫は、その生涯のうちでも何度かの思想の変容を見せているが、本誌の刊行時期はトルストイアンから市民的芸術論者に移行する時期にあたっている。おりからのトルストイ・ブームに大きな影響を与え、のち民衆芸術運動の拠点ともなった本誌は、大正デモクラシー期の思潮を辿る上で不可欠の資料である。

## 加藤一夫関連年表

- 一八八七年 和歌山県西牟婁郡防己村に生まれる(明治一〇)
- 一八九九年 和歌山県立田辺中学校に入学
- 一九〇〇年 毛利榮庵・田辺にて『牟婁新報』創刊
- 一九〇二年 同盟休校を呼びかけ、退学。翌年和歌山中学に転校。この頃熱心に教会に通い、そこで沖野岩三郎らに出会う。和歌山教会にて洗礼を受ける
- 一九〇五年 和歌山中学卒業。明治学院神学部予科に入学。同期には賀川豊彦・中山昌樹ら。
- 一九一〇年 同学院卒業。日本基督教會・文芸会、同院教会にて副教師として一年ほど従事
- 一九一一年 ユニテリアンに転じ、内ヶ崎作三郎の芝の統一教会に所属。『六合雑誌』の編集を手伝うなどする
- 一九一三年 統一教会を辞任
- 一九一四年 トルストイアンに傾く。光を翻訳出版。鎌倉女学校の教師に就任。四月後、辞任して一時帰郷。この頃、自分自身の本質を中心におく『本然生活』に踏み出す
- 一九一五年 同郷の西村伊作の協力、援助で『科学』と文芸』創刊
- 一九一六年 小笠原小町と結婚
- 一九一七年 『科学』と文芸』『近代思潮』に改題。人見東明を誘い、再出発となる。この頃、民衆芸術運動の主唱者のひとりとして活躍をはじめる
- 一九一八年 三月、復讐。坪田譲治・福田正夫らと同人に加える
- 一九一九年 小川未明・賀川豊彦ら同人となる
- 一九二〇年 『科学』と文芸』脱刊
- 一九二一年 神田豊徳・直木三十五らと出版書肆、春秋社をおこす。『トルストイ全集』『ドストエフスキー全集』『カーライル全集』『大思想エンサイクロペディア』等を出版
- 一九二二年 『労働』創刊
- 一九二三年 自由人連盟を創立し、『自由人』創刊。社会主義同盟に参加。アナキズム運動に近い地点に立つ。『加藤一夫著作集』を春秋社より出版
- 一九二五年 関東大震災。危険人物として東京を追放され、芦屋に移住する
- 一九二七年 『原始』創刊。アナキスト対立の頃は、文芸色の濃いアナキズム系機関誌としての役割を果たす。八月、東京へ帰る
- (前掲) 神奈川県茅野郡新治村中山へ転居。農本主義的な生活圏づくりの実践を構想
- 一九四三年 川崎に転居。この頃から日本信仰に傾斜
- 一九五一年 永眠。享年六三歳

## 加藤一夫 (一八八七—一九五二)

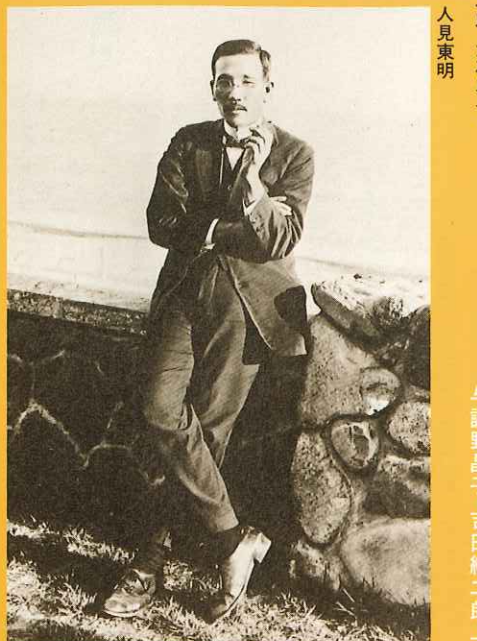
和歌山県生まれ。一九〇五年明治学院に入学。日本基督教會等の副教師を務め、ユニテリアンに転じてからは、『六合雑誌』の編集を手伝うなどするが、キリスト教に懐疑的となり、むしろトルストイにひかれる。一九一五年同郷の西村伊作の力を借りて『科学』と文芸』を創刊。民衆芸術運動の主唱者として大正デモクラシーの翼を担う。一九一八年春秋社をおこし、『トルストイ全集』等を企画。以後、『労働』『自由人』『原始』『大地に立つ』『農村社会研究』などの雑誌を創刊、『本然生活』を軸に時代にささがる思想の変容を見せた。

## 西村伊作 (一八八四—一九六三)

和歌山県生まれ。父方の叔父に大逆事件で死刑する大石誠之助があり、少年期よりその思想的・人間的影響を受ける。(『科学』と文芸』に執筆の大石七分は、伊作の弟)。一九〇三年広島島の私立明道中学校卒業後、独学で英語を学び、原書で科学・美術・哲学などの書物を読破。広い教養を身につける。このことが後に加藤一夫に『科学』と文芸』発刊をもちかけられた際の基盤となった。一九二二年与謝野晶子・石井柏亭・河崎なつらと文化学院を創立。終生変わらぬキリスト教的ヒューマニズムを基盤に学院の指導にあたる。

## 人見東明 (一八八三—一九七四)

本名内吉。詩人、東明と号す。岡山県生まれ。一九〇五年片上天弦、水野葉舟らと東京韻文社を結成。一九〇三年早稲田大学入学。一九〇七年相馬御風・野口雨情らと早稲田詩社を結成、口語詩を提唱。以後、口語自由詩に専念。一九〇九年秋田雨雀・楠山正雄らと雑誌『劇』詩発行。翌年詩集『夜の舞踏』出版。一九一四年頃から清浦青島・清浦明人のペンネームで小説感想を多く執筆。一九一六年『科学』と文芸』改題、『近代思潮』発刊に清浦明人の名で主要メンバーとして参加。一九二〇年日本女子高等学院(後の昭和女子大学)を設立、以後女子教育に情熱を傾ける。



右から三人目、佐藤春夫、一人おいて石井柏亭、一人おいて西村伊作、一人おいて沖野岩三郎、大石真子、人見東明

## 主要執筆者

- 秋田雨雀・安部磯雄・安倍能成・生田長江・石井柏亭・大石七分・岡田八千代・小川未明・沖野岩三郎・賀川豊彦・加藤一夫・岸田劉生・木村莊八・小酒井光次・龍田愁平・辻潤・坪田譲治・富本一枝・内藤・中山昌樹・長与善郎・西村伊作・昇・曙夢・野村陽平・馬場孤蝶・原・阿佐緒・人見東明・福田正夫・武者小路実篤・百田宗治・安井曾太郎・山野虎市・与謝野晶子・吉田絃二郎・吉野作造・和辻哲郎

## ● 推せん言葉

大正文芸史の空白を埋める資料——井上靖  
まぼろしの文芸誌と言われ、全号を通して眼にすることがなかなか出来なかった『科学』と文芸』が、この雑誌の主宰者・加藤一夫の長女加藤不二子さんと、関係者の方々の努力によつて、全三三冊をそろえ、ここに復刻成ったことを嬉しく思います。途中、『近代思潮』と改題するまでの前期『科学』と文芸』は、詩歌・小説はもちろん、文学・科学・宗教・美術等幅広い分野の論文、感想文、更に絵画や彫刻の写真などを数多く掲載、総合誌としてなかなかめずらしいものでした。『近代思潮』以後、題名をもとに戻した後期『科学』と文芸』は、民衆芸術運動を推進し、特に、大正時代初期に発生した民主主義的詩の理論提唱の場でもあり、作品発表の舞台でもありました。当時の中堅、あるいは無名であったさまざまな人たちが執筆して、それぞれの仕事を跡付けています。『科学』と文芸』の復刻は、大正時代初期から中期へかけての、加藤一夫を始めとする多くの執筆者たちの、主義主張を散見できる資料として、更に、今まで空白であった大正文芸史の一面や、詩の歴史を掘りおこす資料として大変意義ある企画であろうと思います。(作家)

## 加藤一夫の構築した大きな広場——紅野敏郎

『科学』と文芸』について調査し、その時代的な意義に言及した一文を草してから約二十七年余になる。あの頃は『白樺』を軸にしながら、大正期の雑誌を探索しつづけていた。コヒーもない時代のこと故、二冊、一冊、メモをとりつづけていた自分の姿がなつかしく思い出される。洛陽堂との縁で『科学』と文芸』は、『白樺』と結びつくし、また中心的推進者でトルストイアンだった加藤一夫は武者小路周辺人物というイメージが最初にあった。同時にのち文化学院を創設した新宮出身の西村伊作との『共同事業』によつて生まれた事実を知ったとき、大逆事件のその後のかわりという視点からも、『科学』と文芸』は私に大きな刺激を与えてくれた。ここから沖野岩三郎への関心もはじまった。小川未明・坪田譲治・百田宗治らの存在にも目を見はった。一時期『近代思潮』と改題したときの漱石追悼文(秋田雨雀・石山徹郎ら)は、漱石研究者も当時はまだ注目していなかった。文学・美術・トルストイ・民衆詩・第二次世界大戦下の社会状況と呼応しながらこの時期の加藤は大きな広場を構築した。洛陽堂から下部梢男(彼も『白樺』の衛星誌『黒光』を出していた)に経営が移行した前後には、米騒動を背景に印刷職工のストライキもあった。いまその『科学』と文芸』が復刻される。先鞭をつけた私としてもまことにうれしい限りである。大正文学関係の研究がさらに十歩も二十歩も深まってくれたい。加藤一夫の娘・加藤不二子さんが、このたびの復刻について寄稿者の著作権の擁護に精一杯の努力をされたことも記録しておきたい。(早稲田大学教授)

## 渴望を、やす復刻——西田勝

『科学』と文芸』はトルストイ的人道主義者から民衆芸術論者へ転換して行った時期の主宰者加藤一夫の傾向を反映して、白樺派系の作家をはじめ、革新的な自由主義者・キリスト教社会主義者・民衆詩派などが寄稿した一九〇年代デモクラシー運動の一端を支えた文学中心の総合雑誌であった。しかし、こういうことが、底はきり言えるようになったのは最近のことだ。つい最近までその全貌が掴めなかった。この雑誌ともども、加藤一夫のことを知ろうとして今から三十数年前、東横線武蔵小杉駅前に遺族が牛乳店を開いていると聞いて訪ねて行ったことがある。夫人から手元に、戦前に出した著書も雑誌も、冊もないと言われてガッカリするとともに人世落莫の感を深くした記憶がある。それから二冊、二冊と集めたが、なかなか集まらない。それが数年前、いくらかまとまって某古書店の目録に出た。私蔵すべきではないので、大学図書館に購入してもらおうとすると、これを機に他の大学図書館の協力をえてコピーもとり、全三三冊中二八冊を視野に収めることができ、長年の飢えをようやく満たすことができた。

## 大正デモクラシーを濃密に体现——野口富士男

明治このかた、民衆に眼をむけるという広い意味での社会主義思想ないし社会主義運動の足跡をかえりみると、キリスト教との関連の深さに気がつく。文芸』とのかわりにおいて、科学知識の普及と汎労働主義を提唱した『科学』と文芸』の場合も、その例外ではない。『科学』と文芸』全三三冊がたどった軌跡は、途なかばで『近代思潮』と誌名をあらためたり、個人雑誌の形をとりざるを得なくなったり、出資者や発行所の交替にともなう判型も四六倍判から菊判に変形したり、ページ数のいちじるしい増減など、めまぐるしい変更を強いられた悪路の連続に終始している。にもかかわらず、和歌山県出身で明治学院神学部で学びながら信仰確立に到達し得ぬまま、文学に活路をもとめた加藤一夫が、後に東京で自由主義的な男女共学の文化学院創立者となった、同郷の若き富豪・西村伊作に出資を求め、創刊した当時のどこまでも高踏的でありつつ、二面においてはあくまで民衆的であろうとした初志は、幾多の曲折にもめげず貫徹されている。各人各様ではあったものの、人道主義者・キリスト者・民衆詩派がこぞつて民衆芸術論を鼓吹したのである。トルストイの影響、海外美術の紹介、宗教、科学などをふくめて、『科学』と文芸』はより広い視野をもったという意味では、『白樺』以上に大正デモクラシーのありようを最も濃密に体现したのである。改憲論が時折ちらつくころに、人手が絶望的な状態にある『科学』と文芸』の復刻によつて、ありし日の民衆芸術論陣の全貌に接し得るのは至福と言わざるを得ない。拍手して刊行を待つ。(作家、日本文学協会理事)





# 無明

加藤 一夫

物語のはじめに

朝、床の中で眼がさめるとすぐ、「今日は土曜だな」と自分は思つた。そしてそれが一つの重い重荷となつて終日自分の肩の上にかゝつた。明日は日曜で、また厭な説教を教會でしなきゃならぬと思つたからである。

教會で説教をする、だが、一體自分は何を説教するつもりだ、自分には説教すべき何者もない、のみならず自分には根本的な信仰すらない。そんな人間が説教をするなんて、寧ろ悲惨なる滑稽だと云はねばならぬ。

朝の御飯がすむと、自分は直ぐ自分の室にかへつて、机のまわりを片付けたり室内を掃きさよめたりした。そして静かに机の前に端坐した。この何ものもない頭から人の靈性を養ふべき生命を搾り出さうとしてである。

自分は先づ聖書を読んだ、だが以前はあれ程深い眞理と強い力と輝ける光とを自分に與へた聖書も、今はもう砂を嚙む様な無味に過ぎない。自分はウォーズオスやテニソンの詩集を出した、けれど仍りそれ等にも何等の感興がない。ことにそれを説教の材料にしやうとするのだから尙更もつて駄目なことは云ふまでもない。エノック・アッデンの話でもしてやらうかと自分は思つた、けれどやつぱり、自分の心の底から湧いてくる感じてなければ語ることの出来ない自分は、おしきつてそれをやつて見る氣にもなれなかつた。

自分は失望した、そして苦しんだ。自分は本を閉ぢた、ノート・ブックも閉ぢた。そして町に出た。何處にと云ふあてもなく歩きまわつた。道々自分は思つた。

——自分は一體、講壇で神に祈り、神を讃美し、基督に神と自分との仲保をたのまなければならぬ身分だ。だが自分は果して神を信じて居るか、基督の神性や彼の十字架の贖罪的意義を信じて居るか、その後者を信じて居ないのは勿論であるが、前者と雖も實に怪しいものだ、もし誰か自分に向つて、「君は神を信じないのか」と訊くならば自分は勿論「否」と答へる、けれどそれと反對に「君は神を信じて居るか」と問はれても、仍り同じ様に「否」と答へるより外はない。



『社会文学雑誌叢書』第1期(1~12) 概要

1 家庭雑誌

- 全六巻・別冊一
- 堺利彦・大杉栄ほか編
- 一九〇三(明治三六)年〜一九〇七・一九〇九年
- 菊判・原形版函入/総二、五五〇ページ
- 総五四冊・付録二冊・別冊一
- 解題 鈴木裕子
- 揃定価 四八、〇〇〇円

2 天鼓

- 全二巻・別冊一
- 田岡嶺雲編
- 一九〇五(明治三八年)年〜一九〇六年
- B5判・合本版/総一、二三四ページ
- 解題 西田勝
- 揃定価 二八、〇〇〇円

3 火鞭・ヒラメキ

- 全一卷
- 白柳秀湖ほか編
- 一九〇五(明治三八年)年〜一九〇六年
- B5判・合本版/総六四四ページ
- 解題 西田勝
- 定価 一五、〇〇〇円

4 簡易生活

- 全一卷
- 上司小剣編
- 一九〇六(明治三九年)年〜一九〇七年
- 菊判・合本版/総一九八ページ
- 解題 西田勝/解題 岡野幸江
- 定価 三、八〇〇円

5 近代思想

- 全二巻
- 大杉栄・荒畑寒村編
- 一九二一(大正元年)年〜一九二六年
- 菊判・合本版/総一、三六〇ページ
- 解題 堀切利高
- 定価 九、八〇〇円

6 第三帝国 附 新理想主義

- 全九巻・別冊一
- 茅原華山・石田友治編
- 一九二三(大正十二年)年〜一九二八年
- A4・A5判・合本版/総四、一四四ページ
- 解題 松尾尊光
- 揃定価 一七〇、〇〇〇円

7 へちまの花

- 全三巻
- 堺利彦編
- 一九二四(大正十三年)年〜一九二五年
- A3・A5判・合本版/総一三六ページ
- 解題 荻野富士夫
- 揃定価 五、〇〇〇円

8 反響

- 全二巻
- 生田長江・森田草平編
- 一九二四(大正十三年)年〜一九二五年
- 菊判・合本版/総一、六八八ページ
- 解題 浦西和彦
- 揃定価 一八、〇〇〇円

9 新社会

- 全七巻・別冊一
- 堺利彦編
- 一九二五(大正十四)年〜一九二九年
- 菊判・合本版/総三、四一八ページ
- 解題 堀切利高
- 揃定価 七五、〇〇〇円

10 国家社会主義

- 全巻
- 高島素之編
- 一九二九(大正十八)年
- A5判・合本版/総二七二ページ
- 解題 田中真入
- 定価 四、八〇〇円

11 洪水以後

- 全二巻・別冊一
- 茅原華山編
- 一九二六(大正十五年)年
- B5判・上製/総五九八ページ
- 解題 福田久賀男
- 揃定価 一八、〇〇〇円

12 文明批評

- 全二巻
- 大杉栄編
- 一九二八(大正十七)年
- 菊判・上製/総一五二ページ
- 跋 荒畑寒村・西田勝/解題 堀切利高
- 定価 四、六〇〇円

『社会文学雑誌叢書』第2期全七集(13~19) 概要

13 科学と文芸

- 全七巻別冊一
- 加藤一夫編
- 一九二五(大正十四)年九月〜一九二八(大正十七)年八月
- B5判・上製函入(三三冊を合本)
- 総二、五〇〇ページ
- 別冊 解説・跋・総目次・索引
- 解題 紅野敏郎『科学と文芸』再読
- 大和田茂『科学と文芸』と加藤一夫
- 跋 加藤不二子『父・加藤一夫』
- 科学と文芸の『科学と文芸』のこと
- 揃定価 九八、〇〇〇円
- 一九二七年一〇月刊行

14 中外

- 全二巻・別冊一
- 内藤民治編
- 一九二七(大正十六)年一〇月〜一九二八(大正十七)年八月
- B5判・上製函入(全二二冊を合本)
- 総七、五〇〇ページ
- 別冊 解説・総目次・索引
- 解題 岩井忠熊・堀切利高
- 揃定価 二二〇、〇〇〇円
- 一九二八年五月・九月・十二月刊行予定

15 日本評論

- 全四巻・別冊一
- 茅原華山編
- 一九二六(大正十五年)七月〜一九二七(大正十六)年一月
- B5判・上製函入(全二七冊を合本)
- 総二、四七〇ページ
- 別冊 解説・総目次・索引
- 解題 茅原健
- 揃定価 六五、〇〇〇円
- 一九二九年五月刊行予定

17 労働文学

- 全二巻
- 加藤一夫編
- 一九二九(大正十八)年三月〜七月
- 菊判・上製函入(全五冊を合本)
- 総二五八ページ
- 解題・総目次・索引
- 解題 大和田茂
- 定価 八、〇〇〇円
- 一九二九年一二月刊行予定

18 原始

- 全三巻・別冊一
- 加藤一夫編
- 一九二五(大正十四)年一月〜一九二七(昭和二年)四月
- 菊判・上製函入(全二六冊を合本)
- 総一、二五六ページ
- 別冊 解説・総目次・索引
- 解題 紅野敏郎・小松隆一
- 揃定価 三〇、〇〇〇円
- 一九二九年五月刊行予定

16 文芸雑誌

- 全二巻
- 生方敏郎編
- 一九二六(大正十五年)四月〜一九二七(大正十六)年四月
- 菊判・上製函入(全九冊を合本)
- 総九七〇ページ
- 解題・総目次・索引
- 解題 福田久賀男
- 揃定価 二五、〇〇〇円
- 一九二九年九月刊行予定

19 クラルテ

- 全二巻
- 小林多喜二編
- 一九二四(大正一三年)四月〜一九二六(大正一五年)三月
- 菊判・上製函入(全五冊を合本)
- 総一八八ページ
- 解題・総目次・索引
- 解題 布野栄一
- 定価 四、〇〇〇円
- 一九二九年九月刊行予定



題改藝文と學科  
近代思潮  
第二卷  
十二月號



不出版

東京都文京区本郷五丁目二八―三  
TEL 〇三(八二二)四四三三  
FAX 〇三(八二二)四四六四  
振替 東京六一九四〇八四  
'87年12月以降の住所  
東京都文京区向丘一―二―二  
電話番号等は変わりません。

